

18世紀のベトナム諒山鎮における在地首長の動向

—脱朗州有秋社阮廷氏・文蘭州周粟社何氏を中心に—

吉 川 和 希

1. はじめに

15世紀初頭の北部ベトナムに成立した黎朝（前期：1428～1527年／後期：1533～1789年）は、18世紀には南北に分裂しており、北部では黎朝朝廷が形骸化し、鄭氏が王府を開設して独自の政権を構築していた（以下、黎鄭政権）。

筆者はこれまで、18世紀の諒山鎮¹⁾を中心に黎鄭政権の支配の変遷や在地首長の動向を考察してきた。諒山鎮では18世紀初頭に地方官（鎮官、諒山鎮の場合は督鎮）が任地に直接赴任することが決定されて以降、末端の行政単位である社ごとに税額と兵数が設定され、藩臣や輔導などの称号を王朝権力から授与された在地首長が各社の税課と兵役を管轄していた。各社の徴税を管轄することは、各種礼銭の徴収など首長にとってもメリットがあった。また在地首長を組み込む形で文書行政が確立し、軍事面では鎮官が在地首長の組織化を進めようとしていた。18世紀半ばの北部ベトナムでは動乱が頻発していたが、諒山鎮も動乱に巻き込まれ、現地居民や広西方面からの移民も反乱勢力に参加していた。かかる状況下で、諒山鎮の在地首長はベトナム王朝権力の支配に協力し、官職を授与されることで勢力を維持・拡大しようとした〔吉川 2019；2020〕。

しかしこれまでの研究では主に禄平州屈舎社韋氏・禄平州率礼社韋氏といった一部の首長集団を取り上げるに留まっており、すべての首長集団の動向を考察できたわけではない。そこで本稿は、脱朗州有秋社阮廷氏と文蘭州周粟社何氏に焦点を当て、18世紀半ば～後半における諒山鎮の在地首長の動向をより体系的に論じる。

2. 脱朗州有秋社阮廷氏

(1) 使用史料

脱朗州有秋社阮廷氏については、仏領期に極東学院の調査によって収集された行政文書の写しがハノイの漢喃研究院に所蔵されており²⁾、これらの文書群を主な使用史料とする。これらの中から黎朝後期の文書を列挙したのが【表1】である。文書の形式ごとに見ると、勅は黎朝系統官職の授与の際に発給されており(No. 15, 18, 54)、差は派遣などの任務を命じるものが多い(No. 1, 3, 12, 14, 21, 22, 23, 27, 36, 37, 39, 40, 44-48)。また示は主に号を冠する武職の授与³⁾(No. 2, 9, 10, 13, 16, 17, 20, 26, 42, 50, 51, 52, 53)や兵・民の管轄・慰撫の命令(No. 29, 30, 31, 41)、付は主になんらかの承認をおこなう際にそれぞれ発給されているが(No. 4, 6, 7, 24, 25, 28, 32, 33, 35, 43, 55)、兵・民の管轄の承認の際にも発給されており、示と付の機能の相違は不明である。

これらの文書群のうち、在地首長の経歴を考えるうえで興味深いのが、阮廷璿に宛てた景興4(1743)年12月28日付け勅(No. 15)である。本勅では、「脱朗州有秋社輔導官員子」の阮廷璿を果敢將軍・防禦使司防禦僉事・下班に任命することが記されている⁴⁾。家譜によれば阮廷璿は辛丑(1721)年生まれで⁵⁾、本勅の発給時点で23歳であり、官職授与前の阮廷璿が「輔導官員子」とだけ記されていることから、これが初の官職授与の可能性が高い。黎鄭政権期において北部山地の在地首長に対しては一般的に宣慰使司・招討使司・防禦使司系統の官職が授与されたが、その中で防禦使司防禦僉事(従七品)は最も下級であり⁶⁾、諒山鎮の在地首長に対して広範に授与されている[吉川 2020:90-93]。このことから、黎鄭政権(ないし鎮官)が官職を有していない在地首長を新たに官制内に取り込む際に授与した官職だった可能性が高い。

以下、有秋社阮廷氏が黎鄭政権の支配体制下で担っていた役割を検討する。

18世紀のベトナム諒山鎮における在地首長の動向
 一 脱朗州有秋社阮廷氏・文蘭州周粟社何氏を中心に ― (吉川)

【表 1】 黎朝後期の脱朗州有秋社阮廷氏関連文書

No	年	月日	発出者	形式	受信者	概要	典拠
1	景興元 (1740)	2月12日	欽差諒山鎮官	差	属藩藩臣支派阮廷玩	「動臣の苗裔」であるため再雄校付首校文獻侯に従い駅を「董幹」	有秋社古紙 4a
2		3月初3日	奉差諒山処督鎮諸衙門官	示	守隘・提忠侯阮廷塔	賊徒の撃破で功績があったため内属正号に	有秋社古紙 5a
3		3月20日	欽差諒山鎮鎮官	差	属藩藩臣支派阮廷田	右雄校付首校文獻侯に従い守里駅を「董幹」	有秋社古紙 6a
4		3月21日	欽差諒山鎮鎮官	付	藩臣支派・譽慶伯阮廷瑞	「戎役」に従い功績があったため旧兵民慶門・光貴などの社の管轄を許可	有秋社古紙 7a
5		3月21日	欽差諒山鎮鎮官	差	属藩藩臣支派阮廷梁	右雄校付首校文獻侯に従い守里駅を「董幹」	有秋社古紙 8a
6		3月21日	奉差諒山鎮武侯官	付	阮璟武侯	兵を率いて寇を駆逐したため璟武侯から武潤侯へ	有秋社古紙 9a
7		4月28日 (鎮官)		付	増泰侯	「戎務」に従い功績があったため、一州の「該牧管理」を許可	有秋社古紙10a
8	景興 2 (1741)	2月初1日	五府・府僚等官	奉伝	諒山処付守隘防禦僉事璟武侯阮廷瑛	脱朗・文淵・七泉・文蘭・温州五州の32社・庄・谷での敵兵と賊徒の征討を命令	有秋社古紙11a
9		2月初1日	奉差諒山処督鎮衙門官	示	僉事・琳武伯阮廷瑞	上上年の賊徒討伐で微功があったため正号に	有秋社古紙12a
10		2月初2日	奉差諒山処督鎮衙門官	示	守隘・都指揮使・義忠侯阮廷瑛	上上年の賊徒討伐で功労があったため正号に	有秋社古紙13a
11		2月26日	奉差諒山処督同官	付	輔導榜忠阮廷森・振祿阮廷壬等	威猛地方に集結した黄羅〔蘭〕賊を殲滅	有秋社古紙14a
12		3月初2日	奉差諒山鎮鎮官	差	藩臣同管阮廷銘	先祖が兵・民を「該管」してきたため、稍武伯に従って派遣	有秋社古紙15a
13		8月初2日	奉差諒山処督鎮衙門官	示	正後号・都総兵瓊武侯阮廷瓊	上上年の賊徒討伐で寸労があったため正号に	有秋社古紙16a
14	景興 3 (1742)	8月12日	欽差諒山鎮鎮官	差	属藩藩臣支派阮廷謝	右雄校副首校琢玉侯に従い德里駅を「董幹」	有秋社古紙17a
15	景興 4 (1743)	12月28日 (黎朝皇帝)		勅	脱朗州有秋社輔導官員子阮廷塔	遠征に随行して功があったため、果敢將軍・防禦使司防禦僉事・下班に	有秋社神勅 1a
16	景興 6 (1745)	6月初3日	奉差諒山処督鎮衙門官	示	正後号属号・指揮使・理忠伯阮廷瑞	上上年の賊徒討伐で寸労があったため正号に	有秋社古紙18a
17		6月初6日	奉差諒山処督鎮衙門官	示	正後号属号・招討使・提忠侯阮廷質	上上年の賊徒討伐で寸労があったため正号に	有秋社古紙19a
18		8月10日 (黎朝皇帝)		勅	果敢將軍・軍民防禦使司防禦僉事・下班阮廷塔	端賊を征討して諒山鎮所を奪還し、大きな功績があったため果敢將軍・軍民防禦使司防禦同知・下聯に任命	Nguyễn Đình Thám 氏所蔵の勅
19		10月初3日	五府・府僚官	奉伝	諒山処藩臣招討使璟武侯阮廷瑛・環忠侯黃廷這・招討僉事榮寿伯章世珍等	水口関山に行き、内地の官僚と「会審公幹」	有秋社古紙20a
20		10月初3日	奉差諒山処原督鎮衙門官	示	樓武伯阮廷樓	先祖が兵・民を「該管」し、阮廷樓も長く勤務してきたため、属号に	有秋社古紙21a
21	景興 7 (1746)	3月11日	奉差諒山鎮鎮官	差	属道阮廷象	先祖が藩臣として兵・民を「該管」してきたため、榜武伯の要請で属道に	有秋社古紙22a
22		3月20日	奉差諒山鎮鎮官	差	属道阮廷豊	先祖が代々兵・民を「該管」してきたため、榜武伯の要請で属道に	有秋社古紙23a
23		3月25日	奉差諒山鎮鎮官	差	属道藩臣阮廷典	先祖が兵・民を「該管」し、「戎務」で功績があったため、榜武伯の要請で属道に	有秋社古紙24a
24		5月初3日	欽差諒山鎮鎮官	付	属藩藩臣宣慰大使・班朝侯阮廷珍	「戎務」に従い功績があったため、兵の「該管」を許可	有秋社古紙25a
25		5月初3日	欽差諒山鎮鎮官	付	属藩藩臣増郡公阮廷堂	「戎務」に従い功績があったため、兵・民の「該管」を許可	有秋社古紙26a
26		5月初3日	奉差諒山道督領殲寇將軍重督鎮正首号前瑚岳奇該奇官指揮使潘派侯	示	藩臣招討同知提忠侯阮廷瑞	黄蘭賊の討伐の際に非常に功績があったため、正首校への任命と属号八員の統率を許可される	有秋社古紙27a
27	景興 8 (1747)	3月初6日	奉差諒山鎮官	差	属道藩臣阮廷順	「戎務」に従い功績があったため、榜武伯の要請で正率隊に	有秋社古紙28a
28	景興17 (1756)	正月24日	奉差諒山処督鎮正首号中提奇該奇官參督香額侯	付	本轄藩臣防禦僉事榜中伯阮廷森	弟の振武伯阮廷壬と共に慶門・光貴・杜平などの社を「該管」	有秋社古紙31a
29		2月12日	奉差諒山処督鎮衙門官等	示	脱朗州有秋社防禦僉事理武侯阮廷理	管轄の兵・民を慰撫して逃亡させないよう通達	有秋社古紙29a

關西大學『文學論集』第 72 卷第 3 号

No	年	月日	発出者	形式	受信者	概要	典拠
30		2月13日	奉差諒山処督鎮衙門官	示	脱朗州有秋社防禦僉事・威鎮伯阮廷賓	管轄の兵・民を慰撫して流亡させないよう通達	有秋社古紙30a
31	景興18 (1757)	2月13日	奉差諒山処督鎮衙門官	示	脱朗州有秋社防禦僉事・權武伯阮廷權	管轄の兵・民を慰撫して流亡させないよう通達	有秋社古紙32a
32	景興20 (1759)	3月15日	欽差諒山鎮鎮官	付	左号属号珣武伯章廷禎・内属阮廷由	率礼・高樓などの社・庄で土人・農人を招集し徭役を負担させるのを許可	有秋社古紙33a
33	景興25 (1764)	3月27日	欽差諒山鎮鎮官	付	属鎮藩管領環武侯阮廷珙	「戎務」に従い微勞があったため、兵・民の「該管」を許可	有秋社古紙34a
34		4月18日	五府・府僚等官	奉伝	諒山処藩臣付守隘招討同知提忠侯阮廷塔	金都御史垣嶺伯陶春蘭・入侍添差知礼番武師に従って水口関山に行き、内地の官僚と「会審公幹」	有秋社古紙35a
35	景興27 (1766)	2月16日	欽差諒山鎮鎮官	付	属鎮藩臣大都督強郡公阮廷繼	「戎務」に従い功績があったため、兵・民の「該管」を許可	有秋社古紙36a
36	景興28 (1767)	3月初3日	欽差諒山鎮鎮官	差	属鎮藩臣支派阮廷譚	右雄校正首号文仁伯の要請で清平駅を「董幹」	有秋社古紙37a
37		8月初3日	欽差諒山鎮鎮官	差	属鎮藩臣阮廷超	右雄校正首号文仁伯の要請で清平駅を「董幹」	有秋社古紙38a
38	景興29 (1768)	9月初10日	奉差諒山原督鎮衙門官	示	中一号同管武伯阮廷彬	先祖が代々兵・民を「該管」してきたため、首号官に従って派遣	有秋社古紙39a
39	景興30 (1769)	11月24日	欽差諒山鎮鎮官	差	属鎮藩臣支派阮廷張	右雄校付首校珣武伯（章廷偵）に従い德里駅を「董幹」	有秋社古紙40a
40		11月24日	欽差諒山鎮鎮官	差	属鎮藩臣支派阮廷定	右雄校付首校珣武伯（章廷偵）に従い德里駅を「董幹」	有秋社古紙41a
41	景興33 (1772)	3月初6日	奉差諒山処督鎮衙門等官	示	脱朗州有秋社藩臣防禦僉事務武伯阮廷彬	慶門社民の「該管」を許可し、民を流亡させないよう通達	有秋社古紙42a
42	景興36 (1775)	11月28日	奉差諒山処督鎮衙門官	示	正後号防禦同知榜忠伯阮廷彬	藩臣を継承し兵・民を20年「該管」してきたため、付首号として本号の官兵を統率するのを許可	有秋社古紙43a
43	景興37 (1776)	10月初4日	奉差諒山処督鎮官	付	藩臣正後号付首号防禦同知榜忠伯阮廷彬	祖業田がある横郷社・歴山社で土戸・農人を招集するのを許可	有秋社古紙44a
44	景興41 (1780)	3月初2日	欽差諒山鎮鎮官	差	属轄藩臣支派阮廷牟	右雄校付首校行成伯に従い平大駅を「董幹」	有秋社古紙45a
45		3月初2日	欽差諒山鎮鎮官	差	属鎮藩臣阮廷何	右雄校付首校行成伯に従い平大駅を「董幹」	有秋社古紙46a
46	紹統元 (1787)	3月初1日	欽差諒山鎮鎮官	差	属鎮藩臣支派阮廷理	雄捷奇属校が欠員となったため、正隊長の要請で暫定的に雄捷奇雄校一隊便宜正付属号に	有秋社古紙47a
47		3月初1日	欽差諒山鎮鎮官	差	属鎮藩臣章世珠・阮廷緩	雄捷奇属校が欠員となったため、副管の要請で暫定的に右雄校二隊便宜正属号に	有秋社古紙48a
48		3月初1日	欽差諒山鎮鎮官	差	属鎮藩臣支派章世珠	雄捷奇右雄校正属校が欠員となったため、付管奇琢玉侯・提忠侯の要請で暫定的に右雄校二校便宜正属号に	有秋社古紙49a
49		3月初1日	欽差諒山処督鎮〔衙門官等〕	示	藩臣属号阮廷琳〔彬？〕	「勳臣の苗裔」であるため、禄平率率礼社脆武伯章廷隆に代わって率礼社嘉果三甲の土兵10率の統率が許可される	有秋社古紙50a
50		3月初1日	奉差諒山処督鎮衙門官	示	正後号防禦同知榜增春侯	正後号防禦同知榜增春侯	有秋社古紙51a
51		3月初1日	奉差諒山処督鎮衙門官	示	譽辛山侯	藩臣を継承し兵・民を20年にわたって「該管」してきたため、付首号官として本号の官兵を統率するのを許可	有秋社古紙52a
52		3月初5日	奉差諒山処督鎮衙門官	示	防禦僉事嘉仲伯阮廷藩	旧督鎮官に従い賊徒を撃破し、非常に功績があったため、属号に	有秋社古紙53a
53		3月初6日	奉差諒山処督鎮衙門官	示	防禦僉事嶺寿伯〔阮〕廷璵	旧督鎮官に従い賊徒を撃破し、微勞があったため、正号に	有秋社古紙54a
54	紹統 2 (1788)	正月16日	(黎朝皇帝)	勅	脱朗州有秋社輔導藩臣阮廷彬	遠征に随行して功があったため、勇断將軍・防禦使司防禦僉事・下班に	有秋社神勅 2 a
55		正月16日	奉差諒山処督鎮官	付	本轄藩臣阮廷彬	藩臣を何年も世襲し過失がなく、首号として本号の官兵を統率するのを許可	有秋社古紙55a

〈凡例〉

有秋社古紙＝「諒山省脱朗州有秋総有秋社古紙」（漢喃研究院所蔵 AH a.4/6）

有秋社神勅＝「諒山省脱朗州有秋総有秋社神勅」（漢喃研究院所蔵 AD a.17/2）

Nguyễn Đình Thơm 氏所蔵の勅＝Nguyễn Đình Thơm 氏（現フアンソン省ヴァンラン Văn Lăng 県ホアンベト Hoàng Việt 社 ナーナン Na Ng 村居住）所蔵

（2）反乱の鎮圧

【表1】の文書群では、首長に対する官職授与（No. 2, 6, 9, 10, 13, 15-18, 23, 26, 27, 52-54）や管轄の（再）承認（No. 4, 7, 24, 25, 33, 35）の理由として軍事的な功績が記載されている。一例として、【表1】の文書群の中で唯一現物が現存している阮廷璿宛て景興6（1745）年8月10日付け勅（No. 18）を掲げる⁷⁾。

果敢將軍・軍民防禦使司防禦僉事・下班阮廷璿に勅す。藩臣として□号の兵丁を率い、端賊を征討し、諒山鎮所を奪還し、多大な功績があったために、すでに（鄭王の）旨によって防禦同知⁸⁾の職にのぼすことを許可した。果敢將軍・軍民防禦使司防禦同知・下聯⁹⁾とする。故に勅す。
景興6年8月10日。

黎朝後期の勅形式の辞令書は、おおむね「受信者に勅す。任命理由+鄭王の旨により…の職にのぼす。…とする。年月日」という構成である。勅は黎朝皇帝により発給されるものだが、黎朝後期には鄭王の裁可を得て発給される〔上田 2019：131〕。黎朝後期の勅式人事文書81道が〔蓮田 2022〕で収録されているが、おおむね同様の構成である。本勅の年月日の箇所には年号の二文字目の「興」から「月」にかけて「勅命之宝」印が押されている。ベトナム王朝の「勅命之宝」印の規格や字体は時期により変化しているが¹⁰⁾、本勅の印影の規格や字体も黎朝後期のそれに類似している。

端賊は1743年頃諒山鎮で活動していた〔吉川 2019：15〕。本勅で阮廷璿が端賊から諒山鎮城を奪還したことで昇進しているため、諒山鎮城の陥落を記す『大越史記全書統編』景興4（1743）年2月条¹¹⁾の「諒山土賊」が「端賊」に当たると考えられる。

1730～1740年代にかけて、藩臣鑽基・端賊・黄鹵賊の反乱により諒山鎮城は

三度陥落した。このうち鑽基は永祐3（1737）年頃に反乱を起こし、永祐5～6（1739～1740）年頃に諒山鎮城を陥落させ、景興3（1742）年2月に捕縛されている〔吉川 2019：15〕。景興元（1740）年の文書に見られる「戎役」・「戎務」・「寇」・「賊徒」（【表1】No. 2, 4, 6, 7）は鑽基ないしその征討を指す可能性が高い。

【表1】No. 11とNo. 26で記される黄鹵賊は中国広西省から到来した集団であり、1744～1745年頃に文蘭州や文淵州を騷擾している〔吉川 2019：16, 20〕。時期から考えると、『大越史記全書続編』巻4、景興6（1745）年12月条¹²⁾で「諒山を破」った賊は黄鹵賊である可能性が高い。【表1】No. 26は景興7（1746）年5月初頭の恩賞なので、恩賞を受けた阮廷璿はこのときの軍事行動において功績があったのだろう。

（3）徴税、徴兵

前述の通り脱朗州有秋社関連文書群には兵・民の「該管」すなわち徴税・徴兵の管轄を（再）承認された付式文書が収録されているが（【表1】No. 4, 7, 24, 25, 28, 33, 35, 41）、大半の事例においてはいかなる社における徴税・徴兵の管轄が承認されたのか、記載されていない。管轄対象が明記されている数少ない事例として、阮廷璿¹³⁾宛て景興元年3月21日付け付式文書（No. 4）を以下に掲げる¹⁴⁾。

欽差諒山鎮鎮官（が以下の文書を送付する）

一、藩臣支派誉慶伯阮廷璿^{ママ}に差す。近頃戎役に追隨し、多大な功績があった。いま鎮務は膨大であり、怠惰であることは認められない。そのため付詞（付式文書か）によって旧来の慶門・光賁などの社¹⁵⁾の兵・民を管轄し、本鎮官につき従い、奉じて公務に当たることを認める。もし尽力して平定することができれば、ただちに詳細に上奏し、救命を支給して頂くことを要求する。もし遵守が敬虔でなければ、規定によって処罰する。ここに付す。

18世紀のベトナム諒山鎮における在地首長の動向
—脱朗州有秋社阮廷氏・文蘭州周粟社何氏を中心に—（吉川）

景興元年 3 月 21 日

本文書は冒頭に「発出者。一、受信者に差す」とあるが、末尾では「ここに付す」とあり、文中にも「付詞によって…を認める」とあるため、付式文書だと思われる。本文書では「戎役」に従い功績があったため慶門・光賁二社の「兵・民の該管」すなわち徴税・徴兵の管轄を許可されている。軍事的功績によって管轄対象が鎮官から承認されるのは、禄平州屈舎社韋氏・禄平州率礼社韋氏の事例〔吉川 2019〕と同様である。前述のように、本付のほかにも【表 1】の中には軍事的功績によって管轄対象が承認される事例が見られる（No. 7, 24, 25, 33, 35）。

【表 1】には、諒山処・副守隘・防禦僉事・璟武侯阮廷珙¹⁶⁾に宛てた景興 2（1741）年 2 月初 1 日付奉伝（No. 8）が収録されている（奉伝は鄭王の命令を五府・府僚官（鄭王府に仕える官僚）が伝達する際の文書）。本文書は黎鄭政権の地方支配において阮廷氏（阮廷珙）が担っていた役割に関する重要な情報を含むため、以下に全文を掲げる¹⁷⁾。

五府・府僚など官（が以下の文書を送付する）

一、諒山処副守隘・防禦僉事・璟武侯阮廷珙に奉じて伝す。「家丁を集めて統率し、州兵に諭し、先導して討伐することを（許可して頂くよう）お願い致します」という（阮廷珙の）上啓があった。恭しく（鄭王の）御許可を奉じた」とのことである。本処（諒山処）の脱朗・文淵・七泉・文蘭・温州など五州の民を招撫し、有秋・□山・茶岩・琦羅・樂墟・黄同・儲峙・石碑・洛陽・丕美・永逸・先会・花甲・仁里・均勞・石□・巖粟・平陵・茂□・武牢・白揚・会歆・嘉勉・義烈・博義・枚坡・雲農・広仁・安宅・雲梯・禄揚・平西などの社・庄・谷（において）、（規定に）照らして兵を徴発し、手下・家丁を同伴するのを許可し、事前に軍事的機宜や武器を整え、本処の安博州輔導黄廷這らに通達して知らせめ、高平処の輔導廷郡公

と協力し、兵を分けて防禦し、太原処の留守官委住侯が迅速に報告するのを待ち、ただちに属下の兵を率いて、先頭部隊として先導し、力を合わせて進攻し、必ず賊徒を捕らえ、地方を安定させるべきである。もし対処する際に違反があれば(?)、法として軍法により処罰する。ここに奉じて伝す。

景興2(1741)年2月初1日

「太原処の留守官委住侯が迅速に報告するのを待ち…」とあるのは太原鎮官が援軍を率いて諒山鎮に到来した際に先導を命じたものだと思われる。諒山鎮官ではなく諒山鎮安博州輔導や高平鎮輔導との協力が命じられているのは、諒山鎮城が陥落していたためだろう。鑽基は永佑5～6(1739～1740)年頃に諒山鎮城を攻略し、その際には諒山鎮総撫吳廷碩が死亡している¹⁸⁾。となると上述の阮廷珙宛て奉伝で記される「賊徒」は恐らく鑽基を指すと思われる。

また本奉伝は上啓をうけて発出されており、啓の発出主体は明記されていないが、おそらく鑽基の反乱と鎮城の陥落をうけて阮廷珙が反乱鎮圧のために州兵の徴発を認めるよう黎鄭政権に要請したものと思われる。通常在地首長がなんらかの要請や報告をおこなう際に発出する上行文書は鎮官宛て申式文書だが[吉川 2019: 10-11]、諒山鎮城が陥落した際などの緊急事態に在地首長が上啓をおこなう事例は、ほかの首長集団にも見られる。たとえば禄平州屈舎社の韋福琴は、景興6(1745)年に作成した諒山督鎮宛て申で動乱鎮圧の際の功績を述べる中で、永佑5年に鑽基が反乱を起こした際に「赴京して謹んで上啓し、恭しく奉伝を奉じ、督領官の先頭部隊に属することを許され」たことを記している[吉川 2019: 18]。このときに韋福琴が発給された奉伝は、前掲の阮廷珙宛て奉伝とも類似した内容だったに違いない。

前掲の奉伝からは、阮廷珙が30あまりの社級行政単位(社・庄・谷¹⁹⁾)において「兵を取る」すなわち徴兵を管轄することを許されたことがわかる。無論30あまりの社級行政単位における徴兵を一人で担当することは不可能であるた

め、同じ血縁集団に属す成員と共同で管轄しており、阮廷珽はその代表者として黎鄭政権に把握されていたと思われる。有秋社関連文書群には諒山鎮官が阮廷氏のほかの人物に号を冠する官職を授与して軍事協力を命じる文書が収録されているが、彼らも上述の各社級行政単位から徴発した兵を統率する形式だったのかもしれない。

（4）流民の招集

既に前稿で述べたように、18世紀後半の諒山鎮では住民の流動性の高さや流亡による徴兵・徴税の困難が問題化していた。また前稿では脱朗州有秋社関連文書（【表1】No.43）も引用し、鎮官が在地首長に対して招集した土人（土着住民）・農人（新来の移民）を私兵とすることを許可していたことを論じた〔吉川 2020：97-98〕。脱朗州有秋社関連文書には、そのほかにも首長に流民の招集を認める文書が収録されている。景興20（1759）年3月15日付けで左号属号珣武伯韋廷禎および「内属」阮廷田に宛てられた付（【表1】No.32）に以下のようにある^{20）}。

欽差諒山鎮鎮官（が以下の文書を送付する）

一、左号属号珣武伯韋廷禎・内属阮廷田に付す。管轄の率礼・高楼などの社・庄は、土地は荒れており民は少なく、田地は多く荒廃しているため、（韋廷禎と阮廷田は）土人・農人を招いて到来・居住させ、共に官役を負担させることを請うた。そこで要請に従い、各社長・庄長らを集めて命令し、善良な民を招集し、田を分配して耕作させ、一律に徭役を受けさせるのを許可するべきである。率礼社は辺境の要害の地に近いので、近隣住民の居住区に移入して滞在を許可すべきである。もし対処が不適當で粗忽や過失があれば、ただちに処罰する。ここに付す。

景興20年3月15日

韋廷禎は禄平州率礼社韋氏の成員であり、率礼社や高楼社など五社における徴税・徴兵を担当していた〔吉川 2019: 7-15〕。韋廷禎に脱朗州有秋社の阮廷田が「内属」しているとあるのは、詳細不明だが、韋廷禎のもとで率礼社や高楼社などにおける徴税・徴兵を担当していたのかもしれない。本付は韋廷禎と阮廷田の要請をうけて率礼社や高楼社における土人・農人の招集を許可する形となっている。上述のように首長にとって招集した流民を私兵に組み込めるというメリットがあったため、首長側が鎮官に対して流民招集を要請したとしても不思議ではない。

禄平州率礼社韋氏関連文書では、景興20年10月12日付けで韋廷禎に対して前述の付とほぼ同内容の付が発給されており²¹⁾、ここでは韋氏が徴税と徴兵を管轄していた率礼・高楼・海晏・禄安・平西五社・庄における農人の招集を韋廷禎が要請して認められている。これは脱朗州有秋社阮廷氏の事例ではないが、諒山鎮の首長が流民の招集を担っていたことは確実だろう。また率礼・高楼二社における流民招集が七か月で再度命令されており、住民の流動性の高さにより黎鄭政権による住民把握が困難だったことの表れといえよう。

3. 文蘭州周粟社何氏

文蘭州周粟社何氏については、後裔の Hà Hòng 氏所蔵の申式文書を使用する²²⁾。ただし損傷がひどく、内容の一部が判読不能である上に、発出された年月日は不明である。以下のような書き出しで始まっている²³⁾。

諒山処文蘭州周粟社の藩臣、正右号首号・招討使司・楊忠伯何国驂、親男輔……武何国驂らが申します。一族の事蹟および自身の功績を陳情致します。元々何国驂らは前始祖の提督寧川侯何鶴……膠水県平居社（を貫としていました?）。折しも呉寇（明朝軍）が国を侵略し、黎太祖がおおいに義兵を起こして呉賊を撃退し、……するのにつき従いました。順天元（1428）年、功臣に封じられ、印信を授与され、輔導となるのを許可され、

鎮南関を守備し、文蘭州・文淵州を管轄し、周粟社を貫籍としました。

本文書の発出された年月日は不明だが、発出者である何国驤らの肩書（藩臣という称号、正右号首号という号を冠した官職など）が黎朝後期の官職であること、文蘭州が黎朝期の名称であること²⁴⁾、申が明命帝（在位1820～1841年）の行政改革以前の時期に一般的な文書形式であること、18世紀半ばの功績が列挙されていること（後述）などから、18世紀後半に発出された可能性が高い。何氏の成員については、18世紀後半の他史料に何国驤ら数名の姓名が記されているが²⁵⁾、何国驤らの姓名は見当たらない。ただ後述【表2】No.3で何国驤が「親侄」と記されており、何国驤は何国驥のオジであることがわかる。なお本申の宛所は記されていないが、諒山鎮の在地首長が発出したほかの申式文書〔吉川 2019：10-11〕と同様に鎮官宛と考えて良いだろう。

本申の冒頭では何氏の祖先移住伝承が記されており、始祖何鶴がもともと山南鎮膠水県（現ナムディン省ザオトゥイ Giao Thủy 県）平居社²⁶⁾を貫としていたとされている。「自らの始祖は15世紀初頭の明朝軍駆逐と黎朝の創建に貢献し、黎朝皇帝（黎利）の命を受けて移住し諒山地域を守備するようになった」とする祖先移住伝承は、現存する諒山鎮の首長集団の家譜の多くにみられるが、その大半は始祖の出身地を父安（現ゲアン省）とする〔伊藤 2003：43-45〕〔Poisson 2004：124-125〕〔Nguyễn Quang Huynh (chủ biên) 2011〕。本文書が18世紀後半に作成されたとすれば、〔吉川 2019：21-26〕で取り上げた禄平州率礼社韋氏の韋廷偵の申（1778年）とともに、上述の伝承を記す最も古い時期の史料である。無論これらの伝承の真偽は不明だが²⁷⁾、韋廷偵の申と同様に何国驤の申も始祖の功績や移住経緯を記すことで自身の藩臣としての正統性を主張しているといえよう。何国驤の申の発出目的は損傷により不明だが、韋廷偵の申は管轄社数の回復のために自身の正統性や先祖代々の功績を申告するものだった〔吉川 2019：21-26〕。何国驤の申も、同様の背景によって発出された可能性はあろう。

上掲の引用箇所が続く箇所では始祖以来の系譜および先祖代々の功績が記されており、その後何国駟の功績が記されている²⁸⁾。

何国駟ら（の代）になると、戊午（1738）年6月某日に、総撫官戸部尚書・肇郡公（呉廷碩）の示を承け、故オジ防禦僉事・瑣禄伯何国駟と共に温州枝梭^{ママ}〔陵〕・枝蘭^{ママ}〔芝蘭〕二社と本処を管轄し任務にあたるのを許可されました。己未（1739）年にいたり、はからずも瓚基（鑽基）という名の逆臣が反乱を起こしました。何国駟は京師に赴き謹んで上啓し、忠誠を尽くして恭しく奉伝を奉じ、先鋒として先導し、賊の集団を掃討し、これから今まで何度も従軍して戦いました。および息子の輔導垣基（伯？）何国駟・檔武（伯？）何国駟らは家丁・手下を招募し、従軍して（賊軍を）討伐し、わずかながら功労がありました。三父子共に文蘭州の義烈・博浪^{ママ}〔朗〕・雲夢・陸奇・富潤・永頼・鳧藻・繁花〔華〕・芝蘭〔関〕・周粟、文淵州の安越・春院などの総・社の兵や民を管轄し、従軍して任務に当たるのを承諾し、みな過失はありません。各期に督領・督鎮・督同などの官の命を受けて派遣され、先頭部隊として賊を破り防ぎ守った功績を、以下に記載致します。

何国駟の功績として、まず1739年における瓚基との戦闘が記されている。瓚基の征討のみ後述する各種功績と区別して記されている理由は記されていないが、既に鄭王府に報告されているためなのかもしれない。また瓚基が反乱を起こすと何国駟は京師に赴き上啓して報告したとあるが、前述の脱朗州有秋社の阮廷珙や禄平州屈舍社の韋福琴と同様の行動である。何国駟らは瓚基の征討に際して功績があったようで、文蘭州10社、文淵州2社の「兵・民」すなわち徴税・徴兵の管轄が認められている。何氏も禄平州率礼社韋氏・禄平州屈舍社韋氏・脱朗州有秋社阮廷氏と同様に軍事的功績によって管轄対象が承認されていることがわかる。

上述の引用箇所が続く箇所では景興2（1741）年以降の功績などが列挙されており【表2】、1740年代以降の各種功績を鎮官にまとめて報告するのが本申の主な目的だと思われる。かかる申を何国驛が発出した理由は、損傷のために読み取ることはできない。ただ禄平州屈舎社韋氏は従来の管轄の再承認のために景興6（1745）年にそれ以前の功績を申でまとめて報告している〔吉川2019：16-21〕。また禄平州率礼社韋氏の場合も、減少した管轄対象の回復のために自身の経歴と功績を鎮官に申告していた〔吉川2019：21-26〕。何国驛の場合も禄平州屈舎社韋氏・禄平州率礼社韋氏と同様に、自身の功績を鎮官に申告することで自身の権益の維持・拡大を企図していた可能性はあるだろう。

何国驛らの各種功績は、大別して動乱の鎮圧（【表2】No.1, 2, 6, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 15, 16, 18, 19, 21）と徴税と徴兵の管轄（【表2】No.3, 4, 11, 14, 19, 25, 28, 29）、対清朝関連（【表2】No.4, 5, 7）、材木の調達（【表2】No.17, 20, 22-24）²⁹⁾、流民の招集（【表2】No.28）に分けられる。

動乱の鎮圧については、鎮圧対象が不明なものも多いが、景興2年頃の瓚基（【表2】No.1, 2）、景興6年頃の黄齒賊（【表2】No.13, 16）はほかの首長集団関連の文書にも記載されている。また鯨賊（【表2】No.15）は、禄平州屈舎社韋氏関連の行政文書でも景興5（1744）年頃に嘉関社（正確な位置不明）を騒擾している。鯨賊については、青池県盛烈社裴氏の『裴氏家譜』に「是後盜賊蜂起，西有庚五，東北有阮求（辰人号鯨賊，貫清河県雷同社，並称勁敵）。官軍討之，連年不克，京城騒動」³⁰⁾とあり、1740年代に黎鄭政権に対して反旗を翻していた阮有球（阮求）を指していると考えられる。阮有球はもともと海陽鎮を拠点に活動していたが、景興5（1744）年頃から京北鎮で活動しており³¹⁾、隣接する諒山鎮に接近することもあったのだろう。

何氏による徴税と徴兵の管轄について、【表2】では鎮官により何度も管轄を承認されている（No.3, 4, 11, 14, 25, 29）。先述の1739年の事例とあわせて、その変遷を社ごとにまとめたのが【表3】である。【表3】をみると同一の社の管轄が何度も承認されていることがわかる。禄平州率礼社韋氏の事例

【表2】 文蘭州周粟社何氏の功績

No	年	月日 (旧暦)	内容
1	景興 2 (1741) 年	3月某日	前督領官姜柱侯の命を受けて派遣され、勝武伯と協力して嗣〔瓚〕基賊を攻撃、武崖県境郷社で守備して勝利
2		9月某日	奉伝を奉じ、先頭部隊として前督領官姜柱侯を先導、瓚基賊を攻め破り、一斉に平定。賊の副將左匡□替秀・屯長□慶廷を生け捕りにし、督領官に納入
3		11月某日	鎮官秦嶺侯が示を発給し、何国驛に親任伝基何国驛・体武何国驛と共に文淵州の野岩・金菊・直尋・博丹・河広・広莫〔廣〕・全〔泉?〕友・春院・安越・平蕩・帰厚十社、文蘭州の富安・純如・宸〔良?〕能・菊円・義烈・永頼・雲夢七社、温州の茄祿・仁里二社、安博州の春陽社などの兵を管轄することを許可
4	景興 3 (1742) 年	6月某日	前督鎮官碩嶺侯・督同官らの付を受けて清朝への使節の行路を確保、付により平莫〔廣〕・時強二社の兵・民の糾合を許可される
5		8月某日	前督鎮官碩嶺侯らの付を受けて、本駅の各総社の民を監督して橋梁と交通路を修理し、丁夫を手配して奉差の候命官を迎援し、鎮南関で任務をおこなう
6		10月某日	外国から到来した暴徒が本州で略奪をおこなったため、前鎮官碩嶺侯の付票を受けて追撃。
7		11月某日	前鎮官碩嶺侯につかわされ、北国（清朝）の犯人姚姓・芳姓を解送して鎮南関上に至り、守隘に引き渡す。しばらくして前衙門官の付によって副首号となる
8	景興 4 (1743) 年	2月某日	前鎮官碩嶺侯らにつかわされ、温州桃榔社で防禦
9		4月某日	奉差統領官太傅綿郡公・參謀官翰林院承旨華岳伯の付を受けてつかわされ、昧市で防禦
10		7月某日	按鎮官の票をうけてつかわされ、八位・蒼□などの地に集結していた棍徒を殲滅
11		10月某日	鎮官林岸侯の付をうけてつかわされ、本兵を率いて岩嶺処を守備し、強盗を防いで制御。しばらくして示によって文蘭・文淵二州義烈・雲夢・博浪〔朗〕・永頼・兎藻・安越・繁花〔華〕計7社の兵・民を管轄するのを許される
12	景興 5 (1744) 年	2月8日	鎮官林岸侯につかわされ、本兵を率い桃榔社で駐屯。しばらくして棍徒が蒼嶺で集結して略奪をおこなったため、付をうけてつかわされ、その地で守備
13	景興 6 (1745) 年	3月某日	黃崗賊が威猛の地を侵略したので、旧督同官枚名琮の付をうけてつかわされ、管轄下の兵丁を糾合して攻撃。親勇輔導垣基何国驛・樞武何国驛は家丁・手下を率いて征討に随行
14		7月某日	督同官から恩賞をうけ、三父子が文蘭州周粟・富淵二社を共同管轄することを許される
15		8月某日	緇賊が武崖・右隴などの地域に逃れ、本処（諒山処）に接近。督鎮官覽山伯の付をうけてつかわされ、管轄下の兵丁を率い、温州枝枝社で防御
16		9月某日	旧鎮官覽山伯の付をうけてつかわされ、鵬武侯と協力して進軍し黃崗賊巢と闘う。佐佑に駐屯したが、支えられず諒山処に帰還、緑平州瀕□処で防禦。
17		12月1日	督領官潘派侯の票をうけて木條200束、刺2担、蒺藜4担を納入、壘を作る
18		12月22日	督領官潘派侯の票をうけ、姜宝伯と協力して長桂地方で賊徒を征討
19		12月21～29日	督領官潘派侯により恩賞をうけ安博州延楽・苗裔二社（から徴発した兵を）統率することを許される
20		12月29日	木條80束、刺3担、蒺藜4担を納入
21	景興 7 (1746) 年	正月	督領官潘派侯の分付をうけて親勇何国驛・何国賊と共に城中兌門を防禦
22		正月2日	木條60束、刺1担、蒺藜2担を取り、壘を立てて納入
23		正月5日	木條90束、刺3担、蒺藜5担を取り、壘を立てて納入
24		正月9日	木條120束、刺5担、蒺藜6担を取り、壘を立てて納入
25		4月某日	督領官潘派侯により、何国驛・親勇何国驛・何国賊が文蘭・文淵二州合計8社、義烈・安越・雲夢・博浪〔朗〕・兎藻・永頼・繁花・富淵などの社を共同管轄することを許可される
26		5月某日	督領兼督鎮官潘派侯が示により何国驛を正右号首号とし、本号副・属各□官・兵を統率することを許される。また奉伝を奉じ、文蘭州長州とするのを許される
27		5月某日	督領官潘派侯が京北処に戻った際に付をうけてつかわされ、本号の官兵・銃口・器械・車需などを統率し、巡守官姜宝伯と共に団城に駐屯
28		12月某日	督領官潘派侯・督同翰林院侍書官から示を発給され、文蘭州陸奇社・文淵州春院社を管轄して流民の招集を許される
29	景興 8 (1747) 年	8月某日	督鎮衙門官らの票をうけてつかわされ、本号の官兵および山子各族を統率し、黃崗の余党を攻撃し、背和・従合などの社で壘を立てる。恩賞により文蘭州芝蘭社の管轄を許可される

典拠：Hà Hồng 氏所蔵の申式文書（2016年9月22日に Hà Văn Giang 氏宅（thôn Khôn Khê, xã Xuân Mai, huyện Văn Quan）で撮影）

18世紀のベトナム諒山鎮における在地首長の動向
 一脱朗州有秋社阮廷氏・文蘭州周粟社何氏を中心に―（吉川）

【表3】 黎鄭政権から承認された何氏の管轄対象

備覧		同慶		申式文書						
社名	所属	社名	所属	1739	1741	1742	1743	1745	1746	1747
憑厦社	温州憑厦総	憑厦社	温州憑厦総			何国驤				
時強社	温州憑厦総	常強社	温州憑厦総			何国驤				
嘉祿社	温州憑厦総	嘉祿社	温州憑厦総		何国驤・何国駿・何国彭					
良能社	文開州地靈総	良能社	文開県秀川総		何国驤・何国駿・何国彭					
陸奇社	文開州地靈総	陸奇社	文開県秀川総	何国驤・何国駒・何国駿					何国驤	
周粟社	文開州周粟総	周粟社	文開県周粟総	何国驤・何国駒・何国駿				何国驤・何国駒・何国駿		
芝閔社	文開州周粟総	芝閔社	文開県周粟総	何国驤・何国駒・何国駿						何国驤
富潤社	文開州周粟総	富潤社	文開県周粟総	何国驤・何国駒・何国駿				何国驤・何国駒・何国駿	何国驤・何国駒・何国駿	
永頼社	文開州周粟総	永頼社	文開県周粟総	何国驤・何国駒・何国駿	何国驤・何国駿・何国彭		何国驤		何国驤・何国駒・何国駿	
繁華社	文開州周粟総	繁華社	文開県周粟総	何国驤・何国駒・何国駿			何国驤		何国驤・何国駒・何国駿	
義烈社	文開州義烈総	美烈社	文開県美烈総	何国驤・何国駒・何国駿	何国驤・何国駿・何国彭		何国驤		何国驤・何国駒・何国駿	
富安社	文開州義烈総	富美社	文開県美烈総		何国驤・何国駿・何国彭					
雲夢社	文開州義烈総	雲夢社	文開県美烈総	何国驤・何国駒・何国駿	何国驤・何国駿・何国彭		何国驤		何国驤・何国駒・何国駿	
鳧藻社	文開州義烈総	鳧鷖社	文開県美烈総	何国驤・何国駒・何国駿			何国驤		何国驤・何国駒・何国駿	
博朗社	文開州義烈総	博朗社	文開県美烈総	何国驤・何国駒・何国駿			何国驤		何国驤・何国駒・何国駿	
純如社	文開州泉年総	純如社	文開県甘水総		何国驤・何国駿・何国彭					
菊員社	文開州泉年総				何国驤・何国駿・何国彭					
野岩社	文淵州野岩総	野岩社	文淵州野岩総		何国驤・何国駿・何国彭					
金菊社	文淵州野岩総	秋菊社	文淵州野岩総		何国驤・何国駿・何国彭					
直尋社	文淵州野岩総	直尋社	文淵州野岩総		何国驤・何国駿・何国彭					
泉友社	文淵州光貴総	益友社	文淵州光貴総		何国驤・何国駿・何国彭					
憑蕩社	文淵州光貴総	平蕩社	文淵州光貴総		何国驤・何国駿・何国彭					
広展社	文淵州光貴総	広展社	文淵州光貴総		何国驤・何国駿・何国彭					
河広社	文淵州光貴総	河広社	文淵州光貴総		何国驤・何国駿・何国彭					
安越社	文淵州光貴総	越安社	文淵州光貴総	何国驤・何国駒・何国彭	何国驤・何国駿・何国彭		何国驤		何国驤・何国駒・何国駿	
春院社	文淵州安雄総	春院社	文淵州安雄総	何国驤・何国駒・何国駿	何国驤・何国駿・何国彭				何国驤	
博員社	文淵州安雄総	博円社	文淵州安雄総		何国驤・何国駿・何国彭					
帰厚社	文淵州安雄総	帰厚社	文淵州化仁総		何国驤・何国駿・何国彭					

〈凡例・典拠〉

備覧：『各鎮総社名備覧』（漢喃研究院所蔵 A. 570）

同慶：『同慶御覽地輿誌』（Ngô Đức Thọ, Nguyễn Văn Nguyên & Philippe Papin, ed., *Đồng Khánh Địa dư chí*, 2 tập, Hà Nội:

Nhà xuất bản Thế giới, 2002）

申式文書：Hà Hồng 氏所蔵の申式文書（2016年9月22日にヴァンクアン Văn Quan 県スアンマイ Xuân Mai 社

コンケ Khôn Khê 村の Hà Văn Giang 氏宅で撮影）。

と同様に、流動的な情勢のもとで黎鄭政権が首長たちを支配下に留めておこうとすると同時に、首長たちの側も自身の權益を保持するために管轄の再承認を黎鄭政権に求めたのだろう〔吉川 2019：21〕。また何国驤は景興2（1741）年11月にオイ何国驤らと共に約20社を共同管轄することを鎮官に認められているが（【表2】No.3）、多くは1739年に承認された管轄対象とは別の社であるため、本来は何国驤らの管轄だが、なんらかの事情により何国驤が暫定的に管轄することになったのかもしれない³²⁾。

対清朝関連については、清朝への使節の行路の治安維持（No.4）、鎮南関に至るルート上の橋梁や交通路の修築、および候命官³³⁾の迎接や鎮南関での任務（No.5）、清朝へ犯罪者を引き渡すための解送（No.7）などが記されている。前二者は景興2（1741）年の歳貢使派遣³⁴⁾の際の任務であろう。清朝への犯罪者の引き渡しも含め、清朝との交渉は守隘という肩書を帯びた諒山鎮の首長が担当していた〔吉川 2021a：6-9〕。文蘭州周粟社何氏は、諒山鎮の中でも文淵州や温州といった内陸部に集住しているため、彼らのなかに守隘という肩書を帯びた者は管見の限り見当たらない。ただし鎮南関に至るルート上に位置しているため、如上の任務が命じられていたのだろう。

なお何国驤への官職授与については、景興7年5月に何国驤に正右号首号が授与されたことが記されるのみである（【表2】No.26）。ただし首号は号という軍事単位の長官であり、首号の下に副号や属号といった下級官職が存在した〔吉川 2020：94〕。また本申の冒頭に「正右号首号・招討使司・楊忠伯何国驤」とあり、本申の発出までに招討使司系統の官職（最上位の招討使であれば正五品）³⁵⁾を授与されていたことは間違いない。何国驤はある程度黎鄭政権の地方支配に協力した経歴を持つといえよう。

4. おわりに

本稿では、18世紀半ば～後半における脱朗州有秋社阮廷氏と文蘭州周粟社何氏の動向を論じた。以前の論考で取り上げた禄平州屈舍社韋氏・禄平州率礼社

18世紀のベトナム諒山鎮における在地首長の動向
—脱朗州有秋社阮廷氏・文蘭州周粟社何氏を中心に—（吉川）

韋氏と合わせて、18世紀半ば～後半における諒山鎮の首長集団の共通点として、以下の点が挙げられる。すなわち、これらの首長集団がいずれも社ごとの徴税・徴兵を管轄していること、鎮官とのあいだで行政文書がやり取りされており文書行政に組み込まれていること、動乱鎮圧を通して黎鄭政権の地方支配に協力することで黎鄭政権から官職を授与されたり管轄を承認されたりしていたこと、である。

また、本稿で取り上げた文蘭州周粟社何氏の申式文書は、破損が激しく発出時期や内容の一部が不明であるが、18世紀後半に自身の功績を報告するために発出された上申文書だと思われる。特に移民の流入や動乱の多発によって黎鄭政権の支配が不安定化すると同時に、首長の権益も動揺していたと思われる。鎮官が同一の社における徴税・徴兵の管轄を頻繁に承認していること（禄平州率礼社韋氏・文蘭州周粟社何氏）は、流動的な情勢下で主張を通じた支配を機能させようとする黎鄭政権の意図があったと考えられる。このような時代背景を考慮すれば、禄平州屈舎社韋氏・禄平州率礼社韋氏と同様に何氏が自身の功績を鎮官に申告することで自身の権益の維持を企図していた可能性もおおいにあらう。史料の制約によりすべての首長集団の動向を詳細に解明することは不可能だが、諒山鎮の在地首長の一定数が18世紀半ば～後半の流動的な情勢のもとで黎鄭政権の支配下に留まることを選択したことは間違いないといえよう。

（アジア文化専修 准教授）

注

- 1) 黎朝後期の最上級の地方行政単位は「承宣」「鎮」「処」「道」と呼ばれ、諒山はその一つである。本稿では煩を避けるため、最上級の地方行政単位は「鎮」、鎮レベルの地方官は「鎮官」と呼称する。
- 2) 「諒山省脱朗州有秋総有秋社古紙」（漢喃研究院所蔵 AH. a4/6）など。
- 3) 号を冠する官職については〔吉川 2020：87-94〕参照。
- 4) 「敕脱朗州有秋社輔導官員子阮廷璫。為隨征有功，已經旨準應防禦萬職事。可為果敢將軍・防禦使司防禦僉事・下班。故敕。景興四年十二月二十八日」（「諒山省脱朗州有秋総有秋社神敕」第1葉表～裏（漢喃研究院所蔵 AD a. 17/2））

- 5) 有秋社阮廷氏の家譜については、ランソン省ヴァンラン Văn Lãng 県ホアンベト Hoàng Việt 社ナーアン Nà Ấng 村居住の後裔 Nguyễn Đình Thơm 氏が所蔵する「禄命之書」(1896年書写)を利用した(筆者は2015年10月14日撮影)。本家譜の収集にあたっては実地調査の前に伊藤正子氏から貴重な情報および史料のコピーを頂いた。ここに記して感謝申し上げます。
- 6) 『官制典例』巻2, 第10葉表～裏(漢喃研究院所蔵 A. 56)に軍民宣慰使司・軍民招討使司・軍民防禦使司系統の官職が記載されている。防禦僉事については第10葉裏に「防禦僉事〈従七品〉」とある。
- 7) 「(1) 勅果敢將軍・軍民防禦使司(2) 防禦僉事・下班阮廷瑤。為(3) 以藩臣率□号兵丁, 進討(4) 端賊, 克復^{〔註〕}山鎮所, 頗有功(5) 績, 已經旨準應陞防禦同知(6) 職。可為果敢將軍・軍民防(7) 禦使司防^{〔禦〕}同知・下聯。故(8) 勅。(9) 景興六年八月十日。」本勅は2015年10月14日に Nguyễn Đình Thơm 氏宅(注5参照)で収集した。筆者の調査より前に伊藤正子が本史料を実見して写真を著書に掲載しており[伊藤2003: 41], 録文作成の際にはこちらの写真も参照した。なお原文中の括弧内の数字は行数, □は一字不読, 四角囲み文字は同定に不安が残る文字をそれぞれ表す。
- 8) 『官制典例』巻2, 第10葉裏, 軍民防禦使司に「防禦同知〈正七品〉」とある。
- 9) 下班と下聯は共に通資の一で, それぞれ従七品・正七品。黎朝期の通資制度については[八尾 2021] 参照。
- 10) 勅の規格は黎朝後期に11 × 11 cm, 西山期に15.2 × 15.2 cm, 阮朝期に13 × 13 cm [Nguyễn Hữu Mùi 2015: 35-36] であり, 本勅の印影も約11 × 11 cm である。また勅の字体については[Phạm Văn Tuấn 2017] 参照。
- 11) 「諒山土賊陷鎮城, 督鎮武佐詠, 督同陳公昕死之。時芹營劫嘯聚逼城, 壅絶餉道。詠告急于朝, 命陳綿^マ〔廷錦〕率師赴之。錦逗遛不進, 詠等力竭城陷, 皆遇害。藩臣阮廷聘率土兵攻賊, 破之, 復其城。」(『大越史記全書統編』巻4, 景興4(1743)年2月条) 阮廷聘なる藩臣は他史料に見えず詳細不明である。なお『大越史記全書統編』は陳荊和編校『大越史記全書(下)』東洋学文献センター, 1986年を使用した。
- 12) 「賊復破諒山, 督鎮阮潘擊敗之, 復其城。」(『大越史記全書統編』巻4, 景興6(1745)年12月条)。
- 13) 阮廷琦は, 家譜(注5参照)では第15代と記されている。文書中で「藩臣支派」と記されているのは, 長男の家系ではない(阮廷琦は阮廷珍の三男)ためだろう。
- 14) 「欽差諒山鎮鎮官。計。一, 差藩臣支派譽慶伯阮廷琦。係近來追復戎役, 頗有功績。現鎮務浩繁, 不容曠怠。因應給許付詞該管旧兵民慶門・光賁等社, 隸隨本鎮官, 奉付公務。倘能實力承行清平之後, 即具奏聞, 稟請放賜敕命。若恪守不虞, 有條章在。茲付。景興元年三月二十一日」(「諒山省脫朗州有秋総有秋社古紙」第7葉表～裏)。
- 15) 阮朝初期に編纂された『各鎮総社名備覧』諒山鎮(漢喃研究院所蔵 A. 570/2)によれば

18世紀のベトナム諒山鎮における在地首長の動向
— 脱朗州有秋社阮廷氏・文蘭州周粟社何氏を中心に — (吉川)

慶門社は脱朗州安化総に属し、現在のランソン省ヴァンラン Văn Lãng 県チュンカイン Trùng Khánh 社に比定される。また『各鎮総社名備覧』によれば光賁社は文淵州光賁総に属し、現在のランソン省ヴァンクアン Văn Quan 県ダイアン Đại An 社に比定される。

- 16) 阮廷珙は、家譜(注5参照)では第15代、生年は丁丑(1697)年と記されている。
- 17) 「五府・府僚等官。計。一、奉伝諒山処付守隘・防禦僉事・環武侯阮廷珙。係「有啓」^{ママ}編乞糾率家丁、諭州兵、向導攻討」等情。恭奉準元「允」^{ママ}等因。応許招撫本処脱朗・文淵・七泉・文蘭・温州等五州民、有秋・湏山・茶岩・琦羅・楽墟・黄同・儲峙・石碑・洛陽・丕美・永逸・先会・花甲・仁里・均勞・石□・嚴粟・平陵・茂□・武牢・白揚・会歡・嘉勉・義烈・博義・枚坡・雲農・広仁・安宅・雲梯・禄揚・平西等社庄谷、照取兵率、双手下・家丁、預整軍機・器械、通曉本処安博州輔導黄廷道等、協与高平輔導廷郡公、分兵屯壘、待太原处留守官委佐侯飛報、即率所属兵、为先鋒嚮道、併力進討、務在擒獲賊徒、以靖地方。若借「措」置兼双^{ママ}〔^{ママ}〕、惟法有軍應「憲?」在。茲奉伝。景興二年二月初一日」(「諒山省脱朗州有秋総有秋社古紙」第11葉表〜裏)。
- 18) 「諒山鎮総撫參從戸部尚書暉郡公呉廷碩卒于鎮。廷碩出諒山纔数月、藩臣鑽基反、圍团城。城中無兵、或勸之走可免。廷碩曰「吾職守土、当死此城。去将安之。」遂為賊所陷、至是卒。」(『大越史記全書統編』卷3、永佑6(1740)年2月条)
- 19) 黎朝後期の庄は、低地においては権貴・高官・豪富が貧漂の民を招集し荒地を開いた庄寨を指すが[桜井 1987: 336-338]、山地においては移民集落を指す可能性が指摘されている[岡田 2016: 37]。諒山鎮の庄がいずれを指すか判断するのは難しいが、どちらにしても王朝権力の把握度合いが低いことは疑い得ないだろう。谷は詳細不明である。
- 20) 「欽差諒山鎮鎮官。計。一、付左号属号珣武伯韋廷禎・内属阮廷由。係本該率礼・高楼等社庄、土曠民稀、田地多有留廢、乞招土・農人來居同受官役。因応許依所乞、糾飭各社庄長等、招集良善人民、分田樹里、均受徭役。其率礼社係近辺隘、応易入近民住量許駐挿。倘或処置挿宜致有疎悞、即咎在。茲付。景興二十年三月十五日」(「諒山省脱朗州有秋総有秋社古紙」第33葉表〜裏)。
- 21) 「諒山省文淵州高峙街高楼総各社古紙」第8葉表〜裏(漢喃研究院所蔵 AH.a4/7)に「奉差諒山処督鎮衙門官等。計。一、付正左号號属「属号」・珣武伯韋廷禎。係本該率礼・高楼・海晏・禄安・安西「平西」等社庄、曠「土曠」民稀、田地多有留廢、乞招農人來居、同受官役、因応許依所乞、糾飭各社庄長等、招集良善人民、分田樹里、均受徭役。其率礼社瑠薩・那悶二村、頗近辺隘、不宜独許農人居住、応役入近民居处、量許駐挿。倘或処置乖宜致有疎悞、即咎在。茲付。景興二十年十月十二日」とある。
- 22) 2016年9月22日にヴァンクアン Văn Quan 県スアンマイ Xuân Mai 社コンケ Khôn Khê 村の Hà Văn Giang 氏宅で撮影させて頂いた。
- 23) 「諒山処文蘭州周粟社藩臣正右号首号・招討使司・楊忠伯何国驤・親男輔…(六文字ほど欠)…武何国驤等申。為陳由宗跡及己身功績事。原何国驤等由前始祖提督寧川侯何鶴

…（六文字ほど欠）…膠水県平居社。于時吳寇侵国，奉随黎太祖大起義兵勦除吳賊，中興一…（七文字ほど欠）…順天元年，大封功臣，欽授印信，許爲輔導，守禦南関，該管文蘭・文淵等州，以周粟〔社〕貫籍。」

- 24) 『大南一統志』巻41，諒山省，建置沿革，文関県，第69葉裏（東洋文庫蔵 X-2-28）に「黎初置曰文淵州，藩臣〔缺名〕世襲。本朝嘉隆改今県名，仍以藩臣襲管」とある。
- 25) 『北使通録』巻1，第89葉裏～第90葉表（漢喃研究院所蔵 A.179）に収録される景興20（1759）年12月某日付け申式文書に「正後号首号・防禦使・伝基伯何国驥」とあるのが初出である。また景興32（1771）年立碑の野岩石橋碑記（ヴァンクアン県スアンマイ社コンドン Khòn Đon 村に現存。筆者は2016年9月22日に実見）には何国驥が登場する。18世紀後半の史料に記される何氏の成員については〔吉川 2020：90-93〕を参照。
- 26) 阮朝初期に編纂された『各鎮総社名備覧』山南鎮（漢喃研究院所蔵 A.570/1）には，膠水県に平居社は見られない。
- 27) 黎朝の開国功臣に何鶴なる人物は確認できない。黎朝の開国功臣については〔八尾 2009：51-81〕を参照。
- 28) 「〔衍〕至何国驥等，於〔戊〕午年六月日承総撫官戸部尚書・肇郡公示給，許同管与前父兄防禦僉事・瑛禄伯何国驥，該牧温州枝棱・枝〔芝〕蘭二社与本処応務。至己未年不意逆臣名瓚基猖乱。其何国驥赴京謹啓，効忠恭奉奉伝，先鋒向導，勦除賊党，〔自〕此至茲累累随軍戰陣。及親男輔導垣基何国驥・檔武何国驥等招募家丁・手下，従軍攻討，少有寸勞。庶三父子共承得該管文蘭州〔義〕烈・博浪・雲夢・陸奇・富潤・永頼・〔晃〕藻・繁花・芝蘭・周粟，文淵州安越・春院等総社兵民，随軍応務，並無差□。所有各期承督領・督鎮・督同等官差撥，先鋒破賊・屯賊・禦賊功績，開列于后。」
- 29) 木條は木材の一種と思われる〔吉川 2021b：72-73〕。
- 30) 『裴氏家譜』第25葉表～裏（漢喃研究院所蔵 A.1002）。
- 31) たとえば『大越史記全書統編』巻4，景興5（1744）年5月条に「黃五福攻塗山，克之。有求遁入京北，抱壽昌河」とある。なお【表2】No.15で緋賊が逃れた武崖や右隴は，それぞれ太原鎮・京北鎮に属す県名である（『大南一統志』巻38，北寧省，建置沿革および同巻35，太原省，建置沿革）。
- 32) 推測できる事情としては，何国驥の父親が死亡し，何国驥が成人するまで何国驥が暫定的に管轄することになった，などが挙げられる。また阮朝初期には20社のうち10社の管轄が文淵州野岩社の正首校何国驥に継承されている（『阮朝硃本』嘉隆第3集，第8葉表～裏）
- 33) 候命官は使節派遣に先立って鎮南関に派遣され，清朝側の応答を待つ，清朝側の動向を報告するなどの任務を帯びていた〔吉川 2021a：11〕。
- 34) 『大越史記全書統編』巻4，景興2年11月条。
- 35) 『官制典例』巻2，第10葉裏，軍民招討使司。

18世紀のベトナム諒山鎮における在地首長の動向
—脱朗州有秋社阮廷氏・文蘭州周粟社何氏を中心に—（吉川）

参考文献

- 蓮田隆志 2022『後期黎朝勅式人事文書集』RCAPS Working Paper Series RWP-21001, 立命館アジア太平洋大学立命館アジア太平洋研究センター.
- 伊藤正子 2003『エスニシティ〈創生〉と国民国家ベトナム—中越国境地域タイ族・ヌン族の近代—』三元社.
- Nguyễn Hữu Mùi 2015 “Nghiên cứu về thần sắc qua cụm thần sắc ở đình làng Văn Nội (Phú Lương – Hà Đông – Hà Nội)” (ヴァンノイ村（ハノイ市ハドン地区フルオン社）のディン神勅群を通した神勅研究) *Tạp chí Hán Nôm*, số 131, tr. 31–41.
- Nguyễn Quang Huỳnh (chủ biên) 2011 *Thổ ty Lạng Sơn trong Lịch sử* (歴史の中の諒山土司), Hà Nội, Nhà xuất bản Văn hóa Dân tộc.
- 岡田雅志 2016「近世ベトナム国家の異民族観の変容と越境者—内なる化外たる農人をめぐって—」『待兼山論叢』(史学編) 50, pp. 1–42.
- Phạm Văn Tuấn 2017 “Ấn “Sắc mệnh chi bảo” ở Hoàng thành Thăng Long và trào lưu phát ấn đương đại” (昇龍皇城の「勅命之宝」印と同時代の印鑑発行の潮流) *Tạp chí Nghiên cứu và Phát triển*, số 135, tr. 74–89.
- Poisson, Emmanuel 2004 *Mandarins et subalternes au nord du Viêt Nam: Une bureaucratie à l'épreuve (1820–1918)*, Paris, Maisonneuve & Larose.
- 桜井由躬雄 1987『ベトナム村落の形成—村落共有田＝コンディエン制の史的展開—』創文社.
- 上田新也 2019『近世ベトナムの政治と社会』大阪大学出版会.
- 八尾隆生 2009『黎初ヴェトナムの政治と社会』広島大学出版会.
- 八尾隆生 2021「ヴェトナム黎朝期貶資制度の変遷」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』52, pp. 227–242.
- 吉川和希 2019「十八世紀のベトナム黎鄭政権と北部山地—諒山地域の在地首長の動向を中心に—」『東南アジア研究』57–1, pp. 3–30.
- 吉川和希 2020「18世紀のベトナム北部山地における軍政と在地首長—諒山地域を中心に—」『東南アジア—歴史と文化—』49, pp. 85–105.
- 吉川和希 2021a「十八世紀におけるベトナム黎鄭政権の文書行政と対清関係—中越境界地帯の在地首長の役割を中心に—」『東アジアの思想と文化』12, pp. 4–17.
- 吉川和希 2021b「十八世紀北部ベトナムにおける政治的主体としての村落—皂隸・守隸を中心に—」『史学雑誌』130–6, pp. 63–86.